

HOPES

ホープス セカンド

2nd

者と呼ばないで」は、安美さんが、中学校英語弁論大会「創作の部」で発表した英文のタイトルです。安美さんは、流暢な発音で、真っ直ぐに熱く、会場に語りかけました。―被災した時、全国全世界から寄せられた支援への感謝を。メディアからいつまで被災者と呼ばれるのだろうという葛藤を。将来に夢を描いて日々を送る今の私は、皆さんと何も変わらない存在。だから、もう被災

被災者と呼ばないで

佐藤 安美さん(八木沢・芦原)

Don't call us victims



飯館中学校の3年生。3年前に英語の塾に通い始めました。「アメリカの明るくフレンドリーな雰囲気、表現がストレートな英語が好きなんです」。

高円宮杯全日本中学校英語弁論大会

国内最高レベルのスピーチコンテスト。安美さんは県大会「創作の部」で2位となり、11月に東京で行われる中央大会に県代表で臨みます。

9月8日に喜多方プラザ文化センターで行われた県大会。満員の会場が安美さんのスピーチに聞き入りました。



者とは呼ばないで―と。

被災経験を弁論のテーマとすることに迷いがあったという安美さん。家族と話して考えを整理し「やはり主張したいことはそこにある」と確信したそうです。震災当時は、小学2年生。イベントが多い学校生活や、メディア取材が珍しくない環境も、その意味がよく分からなかったと言います。「すごく忙しくて、あつと言っ間で。仮設校舎に移った時のことでさえ、昨日のことのように思い出せます」。しかし成長するにつれ、受け止めきれないと感じた時期も。「被災者と呼ばれないためには、通常より頑張らなくてはだめなんだという意識もありました」。

そうした思いを乗り越えて、何事にも全力を尽くせる今があります。「震災があったからこそ生まれた出会いがあり、今の自分がある。私は飯館中学校で良かった。さまざまなかで良かった。さまざまなかで、今改めて感じています」。

編集後記

●「親父に言われたんで来ました。初めての選挙でやり方わからないんですが…」村議会選挙の投票事務でのひとコマ。村外の勤務先から、投票にやってきた若者の言葉です。選挙の大切さを教える親と、それを聞く子。家族の風景が目につかびます。何でも身近な話題として考えること、自分にも関係することなんだと実感することが大切。そして、次の世代に引き継いでいくことの意味を感じました。(木幡)

●安美さんのスピーチ(上の記事)を会場で聞きました。大会の2日前に駅伝大会に出場し、前夜に熱を出しながらの本番とは―祈るような気持ちでステージを見つめました。しかし心配は無用でした。清々しいスピーチ。安美さんの言葉は、どこまでも真っ直ぐに、会場の私たちの胸を満たしていきました。さまざまなかで、いつも真摯(しんしん)に向き合っていた安美さんたち世代の姿が、次々に思い出されて、涙が止まりませんでした。(星)



飯館村は「日本で最も美しい村」連合に加盟しています。